

The Real Face

取材・文/竹中 聡(本誌) 撮影/鈴木誠一 撮影協力/エフエム滋賀

京都のお寺で、夜に歌った童謡
それは中学の修学旅行でのお話

前日の曇天がウソのように晴れ渡り、琵琶湖畔・エフエム滋賀のスタジオからは、遙か遠く琵琶湖大橋までが鮮明に望める。ここまで美しく琵琶湖が見渡せる日は珍しい。そんな麗らかなある日に、彼女は本誌のインタビューに答えてくれた。

思えば彼女を筆頭に、続々とキャッシャングのCMからアイドルたちが誕生した。その多くがCMからバラエティ界に移行する



小野真弓

おのまゆみ

たり雰囲気ではか聴いていなかったのが、改めて詞を読んでみたんですね。『この歌は何を言ってるんだろう?』と、『回って奥が深いなあ』と気付いてからは、音楽の聴き方が変わりました。『あれまあ、今まで何て聴き方をしたんだろう』と、『好きなアーティストを尋ねればさもありなん。ダントツで『My Cinema』を1位に挙げる。深遠な歌詞のオンパレードである。』

言葉を残すメモではなく、感情を思い出すための写真

質でライブオンエアが予定されていたところ、その前日が急にオフになった。それが解ったのが前前日。つまり取材日の2日前に、取材日の前日がオフと決まった。『結構行き当たりばったりなんで、『やった、休みだ、先に行っちゃえー』と、即決である。ひとりて先に京都に来たというのである。メディアでの、どちらかというところりした感じを、記憶の読者には、この行動力というか、瞬間的に驚かれるかもしれない。』

かといって幼い頃は生傷が絶えないよう



間、彼女はコツコツとレコーディングに励んでいた。「アルバムレコーディングはちよこちよこやってたんで、ずっと籠もってやってた訳ではないんですけどね」。約1年の歳月をかけて1枚のアルバムを仕上げた。それが『SMILE』である。

舞台やドラマの撮影をこなす傍ら完成させたアルバム。「歌手になりたいというのではなかったですけど、昔から歌は大好きで、やりたくらいって手を挙げた感じ」。本業がミュージシャンではないため、専門的に音楽を聴き込んできたというわけではないが、「通っていた中学校が歌に力を入れた学校だったんです。体育祭や文化祭とは別に『合唱祭』というのがあったくらいで、『ふるさと』を学年全員で歌ったんですよ」。それは何と京都の寺院だった。しかも夜、さらにそれが修学旅行の最中だったというのだ。「その時は『夜にダルーよ』とか言っていたんですけど、実際に歌ってみるとものすごく感動で、シンと静かな寺院の中には、独特な響きがあった。卒業時に学校からももらったCDに収録されたその歌は、今でも感動の素である。音楽を仕事にする原体験としてはなかなか経験できない、貴重な体験だ」。

さらにここ数年で、「要所要所で頭に残る歌詞はあっても、意味も解らず歌っている

アルバムでは何曲か作詞も務めた。「書こうと思っても急には書けないので、普段からその時の気持ちとかを忘れないために……」。そう、メモもとる。だが最も多い手法が「携帯で写真を撮るんです」と言っている。言葉を書かず、その場の風景を撮る。「『楽しい』とか『嬉しい』とか、言葉でどうしても単純になつていってしまうけど、本当は複雑ですよ。言葉だけで残しておく、とそれを忘れちゃうんです。その点、写真の方が『ああこういう感じがあった』と思えるので、匂いとか言葉では残せないですけども、写真を撮っておくことで思い出せたりするし、撮ってるものはただの空とか、人が見ると『何撮ってるんだ？』っていうんですけどね」。上手い言葉を探すより、思い出した言葉の方がリアルである。言葉を閉じ込めるために写真を撮るという発想に少し驚く。「『写真を写しても思い出せない時もあるんですけど、まあそれはそこまでのものかなと。意外サッパリした女性でもある」。

その性格は彼女の行動力に繋がっているのかも知れない。取材当日はこの1stアルバムリリースに合わせた関西方面へのプロモーションの一環で、午前中に京都に着き、昼前には滋賀県に移動し、エフエム滋

「癒されます」という京都が「世の中を癒し続ける女性」が癒されます」という京都

「昨日は朝の9時に京都に着いて、一日中から京都から歩いてました。平安神宮に行って、河原町あたりを歩いて、で、梅を見たかったの、で北野天満宮まで行きまいたね。夜は清水寺に行きたかったんですけど、『ライトアップの時期にひとりで行ったら余計に淋しくなるや』と思ったのでやめて、その代わりに今日は朝から東寺に行ってきた。弘法市ってありますよね。本を見て、『21日にあるのかあ』。今日じゃん」と。京都は大好きだがまだそんなに知らないとは言うものの、この立派な脳発力は、ベテランの京都好きも舌を巻くだろう。スケジュールの合間、仕事の合間を縫ってこれだけまわれば充分だ。京都を好きになったきっかけは太秦での撮影だった。近所を散歩して、静かさと街としての爽快感を感じた。以来、仕事では何度か来ていた京都、清水にはほぼ来るたびに訪れる。それでも「京都って、同じ所に行っても飽きないんですよ」と感想を漏らす。オフを一日費やして、「もっと見てみたい」というストレスに近い願いが、今回の入浴でようやく晴らせた。仕事上、他にも魅力的な都市に行くだろうに、何がそれほど気に入っているのだろうか。

誰からも許される爛漫さ

行くあてが決まっていなければ、たまたまた来た行き先も知らないバスにも乗ってしまう。無防備なほどの爛漫さ。「昨日は偶然それが河原町に行くバスで、外を見て『あ、ここ解る、河原町だ、降りよう』っていう感じ」で、ちゃっかり買物も済ませた。

京都ではタクシーに乗るわけでもないのに、とあるタクシーの乗務員氏は梅の咲いている場所を覚えてくれた。寺院に行つては通りすがりの老人が「若いのお参り？ エライねえ」と声をかけてくる。過去にもドラマの撮影などでは、着付けを憶えられずお小言も言われたようだが、気付けば笑って許してもらえていた。

紙幅の都合上、一つひとつに書くことをしなかったが、このインタビュー内、カギカッコでくくられた彼女のコメントの最後には全て「笑」の文字を入れていた。だいたいの「スケジュール」という環境への順応性もさることながら、周りにいる「人間」という環境への順応性すら確かなものにしてしまっている。この関連な笑顔なのかもしれない。取材中も、決して無理に笑っているという風でもない。知らなかつた京都の話題を持ち出せば、本当に興味深そうに顔をほころばせる。「初めてこういうところ（FM局のブース内）で取材と撮影です。何か、不思議な気分」。数々の撮影をこなしてきただろうに、意外にもそう言っているかと思えば、約1時間の取材が終わる頃には「何かカプエでお話している感じがしたねえ」とカラカラと笑っている。彼女が心から笑うことで、見る人の笑顔を誘う。取材を終えて原稿を書き終えた今、改めてアルバムのタイトルを確認した。「『SMILE』。これ以上相応しいタイトルがあるだろうか。そして今日もまた、彼女はどこかで惜しげもなく、どこかで笑顔を振りまいているに違いない。



「昨日は朝の9時に京都に着いて、一日中から京都から歩いてました。平安神宮に行って、河原町あたりを歩いて、で、梅を見たかったの、で北野天満宮まで行きまいたね。夜は清水寺に行きたかったんですけど、『ライトアップの時期にひとりで行いたら余計に淋しくなるや』と思ったのでやめて、その代わりに今日は朝から東寺に行ってきた。弘法市ってありますよね。本を見て、『21日にあるのかあ』。今日じゃん」と。京都は大好きだがまだそんなに知らないとは言うものの、この立派な脳発力は、ベテランの京都好きも舌を巻くだろう。スケジュールの合間、仕事の合間を縫ってこれだけまわれば充分だ。京都を好きになったきっかけは太秦での撮影だった。近所を散歩して、静かさと街としての爽快感を感じた。以来、仕事では何度か来ていた京都、清水にはほぼ来るたびに訪れる。それでも「京都って、同じ所に行っても飽きないんですよ」と感想を漏らす。オフを一日費やして、「もっと見てみたい」というストレスに近い願いが、今回の入浴でようやく晴らせた。仕事上、他にも魅力的な都市に行くだろうに、何がそれほど気に入っているのだろうか。

小野真弓 (おの まゆみ)

81年3月12日生まれ。千葉県山崎市出身。平成14年8月からオンエアされているアコムをはじめ各社のCM、「共犯者」(NTV)、「予言(要室)」などのドラマや映画・舞台。写真集まで幅広く活躍。約1年前、04年3月にはデビューシングルをリリースし、シンガーとしての歴も加わった。去る3月15日には1stアルバム『SMILE』をリリース。自ら「良くも悪くも順応性が高い」と評する前らかな24歳。身長158cm。血液型O型。

Information

3月15日に1stアルバム『SMILE』をリリース。尾崎聖美や伊藤正三らが楽曲を提供し、イルカが歌った名曲「海神謡」も収録。「ホットミルク」「赤色のちから」では自ら作詞も手掛ける。表面に耳に馴染むポップスは、世代によっては'80年代の正統派アイドルの真中かさを感ずるかもしれない。CD+DVDの初回限定盤(写真左)は3200円(税込)、CDのみの通常盤2500円(日本クラウンより発売中。4月22日からは5th写真集「Xin Chan (シン・チャオ)」(音楽専科社)が発売中。

